

私はわる〜い女の子の誘惑に負けて射精してしまうのが性癖です。特に、射精と引き換えに何かを失ってしまう状況で誘惑に負ける、いわゆる「色仕掛け」が好きです。私の色仕掛け性癖は、おそらく女性への強い恐怖心に由来します。私はかつて、付き合っていた女性に手ひどく振られたことがあります。曰く、「頑張ったけど好きになれなかった。もう我慢できない」とのことです。私としては、告白を受理された時点で(熱量に差はあれど)お互いに好意を持っていると考えていましたし、不満があれば言いあえる間柄だと信じていました。そのため、それだけ心を許されていなかったという事実強いショックを受けました。相手の気持ちもわかります。告白を断れば後の関係は悪くなりますし、付き合っているときの不満も自分が我慢すれば丸く収まるのは確かですから。それでも、自分が好意を抱いた相手から、ともに楽しい時間を過ごしていたと思っていた相手から「頑張ってた我慢していた」などと言われてしまった事実は深いトラウマになり、それ以来、純愛モノの作品で興奮できなくなっていました。「こんな都合のいい女の子いるわけない、演技じゃないだろうか」「本当は嫌々エッチに付き合っているんじゃないだろうか」そのような考えが頭をよぎるたび、おちんちんが縮んでしまいます。そこから私がハマっていったのが、純愛とは程遠い、悪意のある女の子によるおちんちんいじめでした。お金を搾取するため、試合に勝利するため、壊れるおもちゃを楽しむため等々... 明らかにこちらに対する好意はなく、利用するために気持ちよくしてくれる女の子の存在はとても魅力的でした。彼女たちに気を遣わせていないか、不快にさせていないか、そんな恐怖におびえる必要はありません。なぜなら、彼女たちは私を舐めているから。見下しているから。気遣いする価値もないと考えているから。愛を向ければ、愛が返されないことを悲しみます。期待を向けられれば、期待に応えられず惨めになります。だから、愛すべき相手ではなく憎むべき相手。期待など向けてこない、ただの獲物としか認識してくれない女性。そのようなわる〜い女の子におちんちんをいじめられることでしか興奮できないようになっていきました。自分は男としては価値がない。だから、お財布としてでも、玩具としてでも、見世物としてでも価値を与えてほしい。そんな倒錯的な思想から、おちんちんを利用して搾取される「色仕掛けマゾ」に堕ちてしまいました。このような性癖怪文書に目を通していただきありがとうございます。カモ扱いとはいえ、このような惨めな男に価値を見出してくれるマゾいじめ女性の方々には感謝しております。